



追悼

田代国次郎先生への追悼のことば

菊池 正治 (久留米大学名誉教授)

2014年1月29日、傘寿を直前にして田代国次郎先生がご逝去された。定年前後の私たちの世代をご指導頂いた先生方の訃報に接するたびに何とも知れぬ深い悲しみが溢れる。

過日、「母との約束—『平和的生存権』を守れ—」（『社会福祉研究 第114号』2012年7月 鉄道弘済会）と題された随筆を拝読し、喜寿を過ぎられても益々ご健勝とばかり喜んでいたところに今回の訃報である。

先生が広島女子大学在職中、私は数度、大学の研究室を直接訪問して先生から特に地方福祉史研究についてのご教授を親しく賜った。「社会の影」に焦点を据えられた社会福祉研究への厳しい姿勢、そして何によりも揺るぎない信念と人間的な温かさに感服し、爾来、今日まで勝手ながら恩師の一人になって頂き、尊敬申し上げ続けてきた。

先の随筆で先生が語っておられる少年期の戦争と引き揚げ体験が研究の原風景であり、人間性の原点がここにあったことを初めて知った。それは、先生が戦中戦後の厳しい非人間的状況の凄惨さを体験され、だからこそ平和を軸に据えた社会福祉論、あるいは社会福祉史の構成を追究されてきたのであろう。先生が自費で出版し続けられた雑誌『草の根福祉』では、現場の福祉実践に携われる方の論文も多く掲載されている。先生が最も期待を寄せられたのが現場の実践者の方々であろう。華やかな表舞台ではなく、地道に福祉実践を行っておられる方々にこそ研究の機会を提供し、「あるべき姿としての福祉実践」の方向を共に考え続けられていた。歴史研究において地方の無名な福祉実践者の発掘もそれらの人々を過去と現在を繋ぐ線として捉え、草の根から築き上げる平和を構築・普遍化しようとされていたように思える。

先生は、最近、「平和的生存権」なる用語を使用されるようになっていた。この概念説明は論文上でなされていたかもしれない。私が勝手に想像したことは、近年、国家によって強権的に進められる生存権の空洞化動向に対する先生の批判と抵抗があるように考える。平和の尊さを肌身とおして体験された先生の心底からの叫びにも似た用語である。先生の研究の目指す所は、終始一貫して「弱者・地方」を犠牲にして「強者・官僚」のつくりだすこの国の在り様への「内なる怒り」の視座から人間の尊厳、反戦、平和の実現の希求にあったと言っても過言ではない。

今、最初にお会いした折、無理にお願いして頂戴した田代蔵書の角印が押された『日本

社会福祉成立史研究』(童心社 1964 年) を手にしながら、先生より賜った数々の学恩に感謝申し上げ、ご冥福を祈りつつ、追悼のことばの筆を擱く。